

トピック まなづるの海 海岸で出会える漂着物たち

相模湾に突き出た真鶴半島の海岸には、相模湾を東から西へ流れる潮流の影響で、さまざまな漂着物が打ち上がります。昨年の春にはコククジラ、そして、今年の1月中旬には、三ツ石海岸でウミガメの死骸が漂着しました。



三ツ石海岸に漂着したアカウミガメ(上)。真鶴漁協の定置網に入ったアオウミガメ[2017年11月撮影](左)。

なかなか出会うチャンスが少ないウミガメですが、実は真鶴の海でも生きている個体もたびたび目撃されています。今回漂着したのはアカウミガメで、認定NPO法人エバーラスティングネイチャー(ELNA)の調査によると、甲羅の長さ78cm、メスの未成熟個体ということでした。日本沿岸で生まれたアカウミガメは、太平洋を回遊し、アメリカ東海岸で成長した後、再び日本に戻って産卵することが知られており、今回のアカウミガメも日本に戻った個体であると推測されました。ウミガメの生態については、まだまだわかっていないことが多く、死んで漂着した個体も、貴重な調査対象となります。昨年のコククジラもそうでしたが、流れ着いたものが我々が知らない海の姿を教えてください。

大型動物の漂着は稀ですが、冬は海岸を歩いて漂着物を集めるビーチコーミングにはオススメの季節です。冬は海の表層と深場とで水温差が小さくなるので、浅場上がった深海生物が漂着したり、寒くなり弱った熱帯性の生物が漂着することもあります。思いがけない発見を期待して出かけてみましょう。

海岸で拾えるさまざまな漂着物。

今回ウミガメの調査を行なったELNAではウミガメ漂着情報を集めています。海岸でウミガメを見つけたら、ELNAまたは遠藤貝類博物館までお知らせください。<情報提供：認定NPO法人エバーラスティングネイチャー <https://www.elna.or.jp>>

真鶴の海況

この冬は海も暖冬の傾向

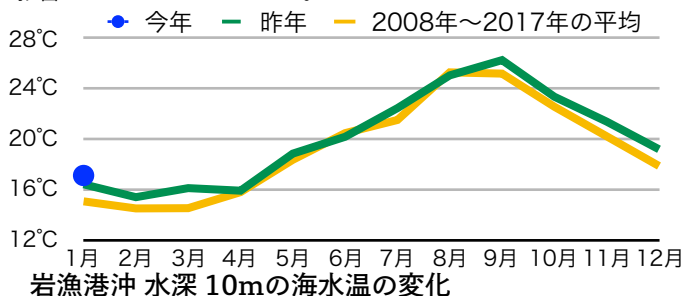
真鶴周辺の海水温は毎年1~3月が最も低く、例年の1月の平均水温は15.0℃まで下がります。しかし、今年の調査では17.1℃と約2℃高くなりました。

海水温の上昇というと、地球温暖化を思い浮かべてしまいま

すが、日本近海では太平洋を南から流れる暖流、黒潮の影響がより目立ちます。現在はこの黒潮の流れるルートが蛇行して通常より相模湾に近づいており(黒潮大蛇行)、高水温の原因になっています。黒潮が運ぶ暖かい海の生物はダイバーにとってうれしいものですが、漁業では、例年通りの水揚げができないなど影響があるかもしれません。



黒潮に乗って来るツバメウオ(福浦沖にて)



真鶴の漁獲情報

冬の風物詩ナマコ、今年は少なめ

例年、年末には町内の鮮魚店にナマコが並びますが、今年は1月中旬になってようやく漁協の直販所に登場しました。「水温が下がらないせいなあ。」と漁協職員さんも気にされていましたが、一般に刺身や酢ナマコで食べられている「マナマコ」は、水温が高い夏には仮眠状態となり、水温が低くなると活動するようになります。毎年12月ごろになると多く見られるようになり、漁船から箱めがねで海底を覗いて長い竿で漁をする「覗突き(みづき)漁」で水揚げされます。しかし、今年は数が少なく、海士さんが潜って探さないといけないそうです。そのためお値段も高め、ちょっと高級品です。

ナマコの体は分厚い水風船のようで、内部の空洞は海水で満たされ、そこに内臓が浮かんでいます。刺身などで食べるのは、ナマコの体壁の部分です。また、内臓の一部を塩辛にした「このわた」は、日本の三大珍味に数えられています。今回は刺身とこのわたを作り、美味しくいただきました。



ナマコは漢字で「海鼠」。ねずみ年の今年、ナマコに注目するのもおもしろいかもしれません。<情報提供：真鶴町漁協> マナマコ(撮影協力：岩ダイビングセンター)

町立遠藤貝類博物館2~3月上旬のイベントスケジュール

- 2月7日(金) 写真展「知られざる 真鶴の海2020」開始(6/24(水)まで)
町立遠藤貝類博物館【要入館料、真鶴・湯河原町民無料】
 - 2月8日(土) 写真展オープニングイベント
海の生物観察コーナー、学芸員による見どころ紹介etc.
町立遠藤貝類博物館【要入館料、真鶴・湯河原町民無料】
 - 2月16日(日) 真鶴自然子どもクラブ「お林をたんけんしよう!」
真鶴・湯河原町の小・中学生対象【要予約、要保険料(50円)】
 - 3月1日(日) 海のミュージアム「真鶴半島ジオストーリー体験ツアー」
町立遠藤貝類博物館、お林【要予約、有料】
- ※各イベントの詳細は、町立遠藤貝類博物館HPをご覧ください。

まなづる 海の月報は、町立遠藤貝類博物館 HPからダウンロードができます。プリントしていただいての掲示・配布歓迎です。